軒瓦製作技法から復元する奈良時代の瓦生産・供給体制
――安芸国を事例に

村 居 喜 道　　考古学専門　前期課程 1 年

1．はじめに

本調査では，国分寺造営期を中心とした諸国の瓦生産・供給体制を，軒瓦製作技法の検討から復元することを目的とした。従来の瓦研究においては，瓦当文様を比較することでその類似性を論じ，氏族や官といったテーマで瓦の伝播を解明しようとするものが主流であった。だが近年，瓦の研究には瓦当文様だけでなく，瓦の製作技法まで含めた広い範囲で検討されなければならないという考え方が主流となっている。その成果によると，国分寺造営に対して中央からの均一的な造営支援があったとは考えられず，諸国の事情・裁量が造営に大きな影響を与えていたことが明らかになりつつある[1)]。

これを踏まえた上で本調査では，諸国における官営施設（国分僧寺・国分尼寺・国府・駅家など）造営について瓦製作技法の観点から検討を行いたいと考える。国分寺の造営という大規模な事業を行なうにあたり，各国でどういった造営体制が取られていたのかを，軒瓦を材料として復元を試みたい。

2．調査方法および対象

具体的な調査方法は実物の軒瓦を現地の博物館・資料館等で実見し，その製作技法を明らかにすることである。その上で，現地で進められている先行研究の検討を加え，各国における国分寺造営期の瓦生産・供給体制の復元を目指すものである。

本調査では，旧国名で安芸国・上総国・阿波国・相模国・武蔵国に該当する地域を分析の対象とした。漸次分析を進めているところであるが，本報告では安芸国の軒瓦生産・供給体制の復元を行ないたい。安芸国では国分僧寺の発掘調査が現在進められており，十分な軒瓦資料が蓄積されつつある。また，複数の遺跡で重圏文軒丸瓦・重画文軒平瓦が出土している。重圏文・重画文という軒瓦の組み合わせは，聖武天皇による難波宮造営の際に始めて用いられ，それまでの蓮華文・唐草文という瓦当文様とは大きく異なる。また重圏文・重画文は奈良時代の一時期，全国各地[2)]で使用された特徴的な軒瓦であり，その導入契機はいつか，あるどういった要因があるのかを解明する必要がある。以上の理由から，本報告では安芸国を取り上げたい。

3．軒瓦の製作技法分析による再分類
――安芸国の事例――

本報告で対象とした安芸国内遺跡は，安芸国分寺跡, 下岡田遺跡, 中垣内遺跡の 3 遺跡である。実見を行なった軒瓦数は，以下の通りである。(表 1 , 図 1 参照)

軒瓦の製作技法については，奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』の分類を基に行なった。軒丸瓦は①丸瓦接合式②杵型一本造り③成形台一本造

表１　安芸国の軒瓦実見数

	軒丸瓦（うち重圏文）	軒平瓦（うち重画文）
安芸国分寺跡	28（4）	18（0）
下岡田遺跡	2（2）	1（1）
中垣内遺跡	2（2）	1（1）

図１　安芸国関連遺跡地図

りの 3 種，軒平瓦は①粘土板桶巻作り②粘土紐桶巻作り③一枚作りの 3 種であり，この分類を基に安芸国の軒瓦製作技法を以下のように設定した。(表 2，3 参照)

本報告で対象とする安芸国では瓦当文様による軒瓦分類が行なわれているが（財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2001b,)，瓦当文様と製作技法の間にどういった関係があるのかなど，現時点では十分明らかではない。瓦当文様による分類に製作技法を加味して軒瓦を再分類することで，もう一度新たな視点から瓦の生産・供給体制復元の手がかりとしたい。

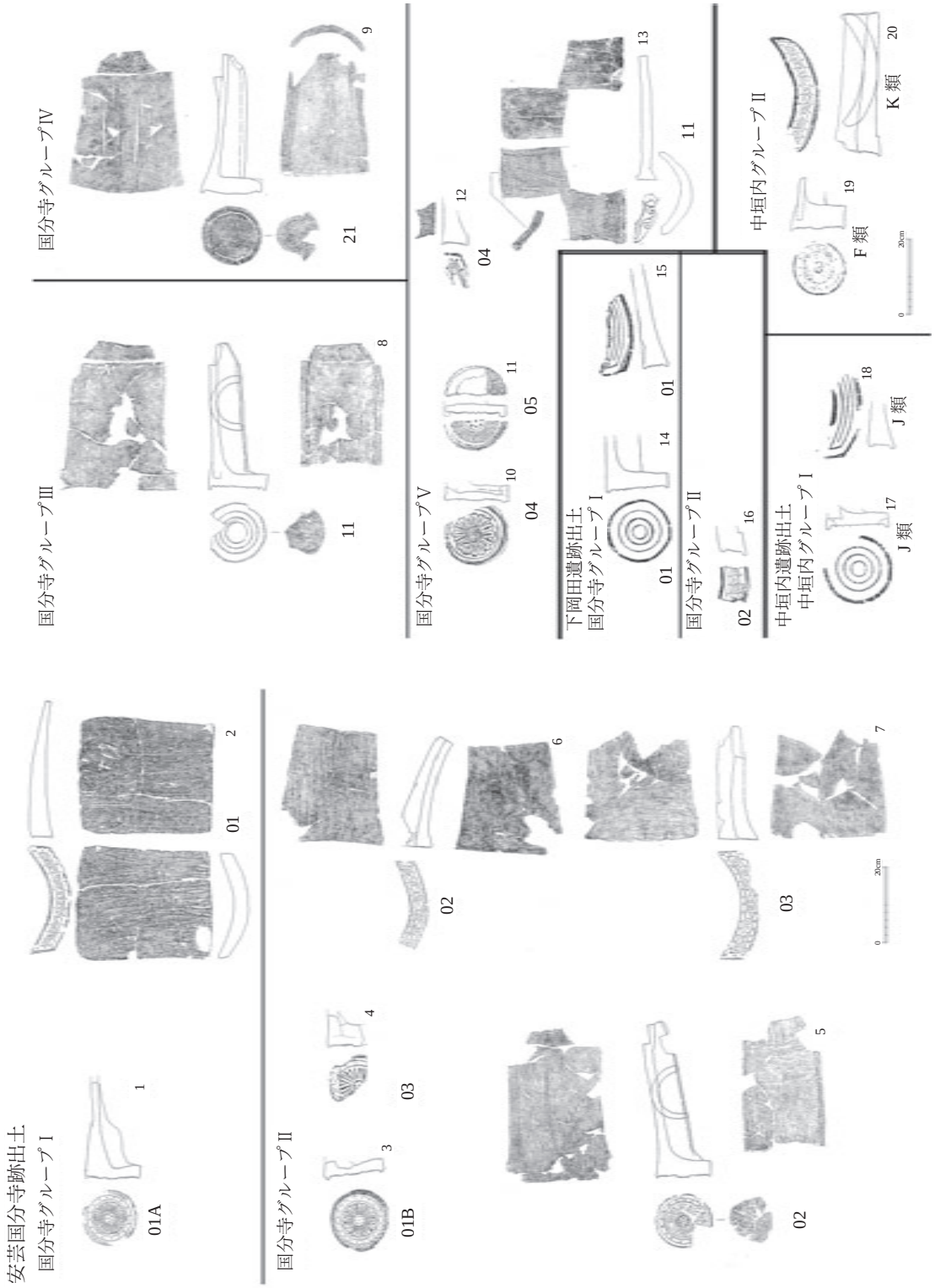

図 2　安芸国内出土の軒瓦

表２　軒瓦の製作技法分類

軒丸瓦	軒平瓦
丸瓦接合式 　接合溝あり（A－１技法） 　接合溝なし（A－２技法）	粘土板桶巻作り 　直線顎（A－１技法） 　曲線顎（A－２技法）
杵型一本造り（B技法）	粘土紐桶巻作り（B技法）
成形台一本造り（C技法）	一枚作り（C技法）

表３　安芸国内出土軒瓦の製作技法復元

軒丸瓦

軒丸瓦 A－１技法（丸瓦接合式）	
該当型式	安芸国分寺跡出土01A 01B 02 03 11型式，下岡田遺跡01型式，中垣内遺跡 J 型式
以下の製作技法復元は，安芸国分寺跡01A 型式のものである。	
１．厚さ30mm，直径140mm ほどの瓦当部を造る。瓦当面の垂直方向に，２回に分け粘土を重ねる。 ２．厚さ15～20mm ほどの丸瓦を造る。 ３．瓦当部裏面，瓦当上端から15mm 内側に，深さ10mm の接合溝を設ける。 ４．接合溝に丸瓦を差し込み，接合部の内外面に粘土塊を貼り付けて補強する。 　接合を強固にするため，丸瓦差込部分にナナメのケズリ，布目残るものあり。 　丸瓦部は凹凸両面ともタテケズリとなる。 ５．側面に８mm 程度かぶる瓦笵を打ち込む。	

軒丸瓦 A－２技法（丸瓦接合式）	
該当型式	安芸国分寺跡出土05型式
実見数が少なく，詳細な製作技法復元はできず。	

軒丸瓦 B 技法（杵型一本造り）	
該当型式	安芸国分寺跡出土04型式
実見数が少なく，詳細な製作技法復元はできず。	

軒丸瓦 C 技法（成形台一本造り）	
該当型式	安芸国分寺跡出土21型式
１．成形台に厚さ15～20mm ほどの丸瓦部，厚さ30～40mm ほどの瓦当部粘土を載せて成形する。 ２．玉縁付近に厚さ20mm 前後の粘土板を追加し，玉縁をつくる。 ３．丸瓦凸面をタテケズリで調整するが，凹面は布目が残る。 ４．瓦笵を打ち込む？	

軒平瓦

軒平瓦 A－１技法（粘土板桶巻作り／直線顎）	
該当型式	安芸国分寺跡01 02 03型式，下岡田遺跡01型式，中垣内遺跡 J 型式
以下の製作技法復元は，安芸国分寺跡01型式のものである。	
１．桶状の円筒模骨の周りに布を巻き，その上に厚さ25～30mm ほどの粘土板を巻く。 ２．瓦当面側に厚さ30mm ほどの粘土板を追加し，顎部分（直線）を造る。 ３．平瓦部凸面を縄タタキ板で成形。 ４．瓦当部へ側面にかぶらない笵を打ち込む。打ち込みの深さによって，瓦当外縁部が有段・無段の２種類に分かれる。 ５．円筒上の瓦を４分割し，桶状模骨から取り外す。平瓦部側面をタテケズリ調整。 ６．平瓦部凹面の瓦当部付近をヨコケズリ，凸面をタテケズリ調整。	

軒平瓦Ａ－２技法（粘土板桶巻作り／段顎）	
該当型式	下岡田遺跡02型式，中垣内遺跡Ｋ　Ｋ－２型式
以下の製作技法復元は，中垣内遺跡Ｋ型式のものである。	
１．桶状の模骨の周りに布を巻き，その上に厚さ25～30mmほどの粘土板を巻く。 ２．瓦当面側に厚さ30mmほどの粘土板を追加し，顎部分を造る。 ３．平瓦凸面を縄タタキ板で成形（後のタテケズリ調整により，縄タタキの痕跡は一切残っていないため不明。）後，平瓦部凸面，瓦当から45～50mmほどの位置から瓦当部水平の方向に切込みを入れ，タテケズリで顎を削り出し調整。 ４．瓦当部へ側面にかぶらない笵を打ち込む。 ５．円筒上の瓦を４分割し，桶状模骨から取り外す。平瓦部側面をタテケズリ調整。 ６．平瓦凹面の瓦当側付近をヨコケズリ。	

軒平瓦Ｃ技法（一枚作り）	
該当型式	安芸国分寺跡11型式
実見数が少なく，詳細な製作技法復元はできず。	

安芸国分寺跡（広島県東広島市西条町大字吉行）

遺跡概要（図３参照）

広島県中央部，西条盆地の東北部に立地する。標高220ｍほどの南面する斜面にあり，古代には山陽道が付近を通っていたと考えられる。1819（文政２）年の記録には，現地にある塚には聖武天皇の歯が埋められているとの伝承があった。江戸時代にはこの塚を中心とした寺院跡が，安芸国分僧寺に比定されていた。1932（昭和７）年，塚の発掘調査が行われ，この塚が塔跡であることが判明した。1969（昭和44）年～1971（昭和46）年に再度調査が行われ，金堂・講堂・塔跡・北門などの主要伽藍と寺域を確認。現在も発掘調査が続けられ，全国の国分寺でも最古級の「天平勝寶二年」銘木簡群が出土している。

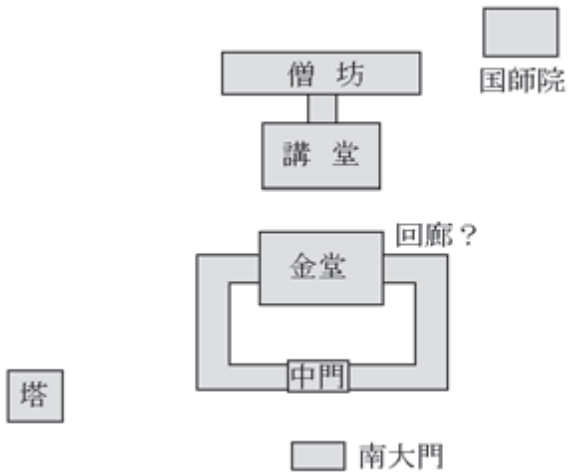

図３　安芸国分寺跡主要伽藍想定図

軒瓦の再分類

『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』では，瓦当文様から軒丸瓦13種，軒平瓦10種類が報告されており，その分類を使用した。瓦当文様の分類に製作技法，出土数から得られた情報を加え，大きく５つのグループに分類した[3)]。

・国分寺グループⅠ……軒丸瓦01A型式
　　軒平瓦01型式

出土数が最も多く，調査箇所に関わらずまんべんなく出土することから創建瓦と考えられるグループである。軒丸瓦01A型式の製作技法は，瓦当部と丸瓦部を別々に造った後，瓦当裏面に接合溝を設けて丸瓦を差し込む丸瓦接合式（Ａ－１技法）。接合を補強するため，接合前の丸瓦に格子目の削り目加工が見られるものあり。軒平瓦01型式は直線顎である。平瓦凹面に模骨痕が残り，明確な粘土紐の痕跡がないことから，粘土板桶巻き作り（Ａ－１技法）と推定。瓦笵打ち込みの深さによって，瓦当外縁部が有段・無段の２種類に分かれる。瓦当外縁部が有段のものは，中山氏によって01亜式軒平瓦として提唱されている（中山2005）。

・国分寺グループⅡ……軒丸瓦01B，02，03型式
　　軒平瓦02，03型式

グループⅠの文様構成を引き継ぐ軒瓦で，後の補修に使われたと考えられるグループである。文様の崩れから，軒丸瓦01A型式より後出と推定[4)]。軒丸瓦01Ｂ，02型式の製作技法は接合溝を設ける丸瓦接合式（Ａ－１技法）である。軒平瓦は粘土板桶巻造りで直線顎（Ａ－１技法）となる。

・国分寺グループⅢ……軒丸瓦11型式

重圏文（三重圏）軒丸瓦。出土数が少なく，後の補

修を中心に使用されたと考えられるグループ。軒丸瓦の製作技法は，接合溝を設ける丸瓦接合式（A－１技法）である。

・国分寺グループⅣ……軒丸瓦21型式

瓦当面に文様を持たない無文軒丸瓦。瓦当部裏面に布目が残り，横置き成形台を用いた成形台一本造り技法（C技法）である。完形品が塔跡を中心に多数出土している。

・国分寺グループⅤ……軒丸瓦04，05型式
軒平瓦04，11型式

瓦当文様も異なり，軒丸瓦，軒平瓦共に主要な軒瓦とは製作技法が異なるグループである。軒丸瓦04型式は杵型一本造り（B技法），05型式は接合溝を設けない丸瓦接合式（A－２技法）である。軒平瓦04型式は段顎で製作技法不明，11型式は曲線顎と段顎のものがあり一枚作り技法（C技法）である。

下岡田遺跡

（広島県安芸郡府中町大字城ケ丘，石井城二丁目）

遺跡概要

府中町の西北端，標高20m ほどの南西方向に伸びる丘陵の南端に立地する。1957（昭和32）年，団地造成に伴う道路工事中に発見される。1963（昭和38）～1967（昭和42）年，1982（昭和57）年～1984（昭和59）年に発掘調査が行われ，２棟の礎石建物，７棟の掘立柱建物跡，竪穴住居，井戸などが検出されている。古代山陽道の安芸駅家に比定される。

軒瓦の再分類

これまでの発掘調査報告書では，軒丸瓦１種，軒平瓦２種が報告されている。瓦笵分類が行なわれていないため，便宜的に重圏文軒丸瓦を01型式，重画文軒平瓦を01型式，唐草文軒平瓦を02型式とする。瓦当文様と製作技法から，２つのグループに分類した。

・下岡田グループⅠ……軒丸瓦01型式，
軒平瓦01型式

中心に珠文痕跡の残る三重圏文・重画文の組み合わせ。軒丸瓦01型式は安芸国分寺グループ１と同じ，接合溝を設ける丸瓦接合式（A－１技法）。軒平瓦01型式は直線顎であるが，成形技法は不明である。出土数が多く，下岡田遺跡で主に使用された軒瓦のグループ。

・下岡田グループⅡ……軒平瓦02型式（未実見）

安芸国分寺跡の軒平瓦01型式と同笵である。安芸国分寺跡のものは直線顎であるが，下岡田遺跡出土のものは段顎。報告書などの実測図を見る限り，粘土板桶巻造りで段顎（A－１技法）のものか。

中垣内遺跡（広島県広島市佐伯区五日市町大字三宅）

遺跡概要

広島平野の一角，瀬戸内海に注ぐ川が形成した丘陵部にあり，標高25ｍほどの南東向きの尾根先端に立地する。1984（昭和59）年，道路改修工事に伴って発見され，範囲確認のための発掘調査が行われた。1987（昭和62）年の調査では掘立柱建物跡を確認。古代山陽道の駅家（大町駅もしくは種箆駅）に比定される。

軒瓦の再分類

『中垣内遺跡　試掘調査概要』では，軒丸瓦・軒平瓦とも２種類が報告され，後の調査でさらに軒平瓦１種類（安芸国分寺01型式と同笵）を確認。分類番号の振られていない軒平瓦のみ，Ｆ２類とする。瓦当文様と製作技法から，２つのグループに分類した。

・中垣内グループⅠ……軒丸瓦Ｊ類，軒平瓦Ｊ類

三重圏文・重画文の組み合わせである。軒丸瓦Ｊ類は安芸国分寺グループ１と同じ，接合溝を設ける丸瓦接合式（A－１型式）。軒平瓦Ｊ類は直線顎であるが，製作技法は不明。中垣内遺跡において，出土数の多いグループである。

・中垣内グループⅡ……軒丸瓦Ｆ類，軒平瓦Ｋ，
K2類（軒丸瓦Ｆ類，軒平瓦K2類は未実見）

蓮華文・唐草文の組み合わせ。軒丸瓦Ｆ類は安芸国分寺01Ａ型式と同文である。軒平瓦Ｋ類は安芸国分寺01型式と同文。製作技法は平瓦部凹面に模骨痕があり，粘土板桶巻き作りかつ段顎（A－２技法）。Ｋ２類は安芸国分寺01型式と同笵の均整唐草文である。実測図から見ると，顎は安芸国分寺の直線顎ではなく段顎であり製作技法はＡ－２型式か。

４．軒瓦製作技法から見た安芸国の軒瓦生産・供給体制

軒瓦の再分類を行なうことで，いくつか問題の所在が明らかになった。本報告で対象とした安芸国において軒瓦の生産・供給体制を復元する上で，どのような事実が判明したのか，また今後解明すべきどのような問題が残されているのかを述べたい。

安芸国内出土の軒丸瓦の大部分は，接合溝を持つ丸瓦接合式技法で造られていることが判明した。一方で安芸国分寺跡の軒丸瓦04，21型式（安芸国分寺グル

ープⅣ）のみ一本造りで，別の導入契機があったと考えられる。また，瓦当面数値測定の結果，同じ重圏文軒丸瓦である安芸国分寺跡11型式，下岡田遺跡重圏文01型式，中垣内遺跡Ｊ類の間には同笵関係が存在しない[5]。

軒平瓦の様相は複雑であり，以下のようにまとめることができる。（表４）

表４　安岐国内の軒平瓦

製作技法／顎の形状	均整唐草文軒平瓦	重画文軒平瓦
安芸国分寺跡	Ａ－１技法／直線顎	出土せず
下岡田遺跡	Ａ－２技法？／段顎	不明／直線顎
中垣内遺跡	Ａ－２技法／段顎	不明／直線顎

安芸国分寺跡出土の均整唐草文軒平瓦01型式が他２遺跡と同笵であり，顎形状（＝製作技法）が異なっていることは，中山学氏の論に詳しい（中山2005）。中山氏は３遺跡の同笵を笵傷などから確認した上で，安芸国分寺跡で創建瓦として造られたこの瓦笵が，国分寺の造営活動が終息して不要となり，大同元（806）年までには[6]軒瓦の再生産が必要となった下岡田・中垣内遺跡に運ばれたと推定する。なおそれは瓦笵の移動のみであり，異なった造瓦工人によって造られたとしている。中山氏の説を踏まえた上で，安芸国内の官営施設（国分寺・駅家）における軒瓦生産体制を以下のように推測したい。

①山陽道駅家（＝下岡田遺跡，中垣内遺跡）を瓦葺きに改修するため，少なくとも２種類の重圏文軒丸瓦瓦笵・種類数不明の重画文軒平瓦瓦笵（下岡田遺跡グループⅠ，中垣内遺跡グループⅠ）が安芸国内に導入される。軒丸瓦製作技法はＡ－１技法，軒平瓦は製作技法不明だが直線顎。年代は天平元（729）年以後と考えられる[7]。

②安芸国分寺造営が開始される時期。（ⅠＡ期）[8]軒丸瓦01型式・軒平瓦01型式（安芸国分寺グループⅠ）が使用される。その年代は天平13（741）年～天平勝寶２（750）年ごろ[9]。軒丸瓦製作技法はＡ－１技法，軒平瓦は直線顎で，製作技法はＡ－１技法である。

③安芸国分寺の造営が進む時期である。（ⅠＢ期）引き続きグループⅠの軒瓦が使用されるが，01B，02，03型式　軒平瓦02，03型式（安芸国分寺グループⅡ）も平行して使用される。年代は８世紀後半～９世紀初頭である。

④安芸国分寺の改修に伴い，重圏文軒丸瓦11型式（安芸国分寺グループⅢ）が導入される。年代は不明である。

⑤安芸国分寺造営に使われた軒平瓦01型式が瓦笵単独で山陽道駅家に運ばれる。安芸国分寺01Ａ型式と同文の中垣内遺跡出土軒丸瓦Ｆ類が組み合う。（下岡田遺跡グループⅡ，中垣内遺跡グループⅡ）安芸国分寺造営を担当する造瓦工人とは別の造瓦工人が造営に携わることで，軒平瓦製作技法がＡ－２技法となり，直線顎から段顎に変わる[10]。年代は安芸国分寺・塔造営後の８世紀第３四半期以降と考えられる。

⑥安芸国分寺の改修（Ⅱ期）に伴い，引き続き安芸国分寺グループⅡの軒瓦が使用される。年代は９世紀前半～10世紀初頭となる。

⑦塔改修[11]に伴い，無文の成形台一本造り（Ｃ技法）軒丸瓦21型式（安芸国分寺グループⅣ）が安芸国分寺に導入される。年代は塔跡出土の平瓦の様相から，８世紀第４四半期以後～10世紀初頭か。

⑧安芸国分寺の改修（Ⅲ期）に伴い，軒丸瓦04，05型式　軒平瓦04，11型式（安芸国分寺グループⅤ）が導入される。年代は10世紀前半～11世紀初頭。Ⅲ期の改修前に塔は崩壊しており，その後他の伽藍施設も廃絶へ向かう。

以上から，安芸国における軒瓦の生産・供給体制を大きく分けて３系統の瓦生産体制として想定したい。（図４参照）３つの系統は瓦笵等技術を共有することはあるものの，製作技法には差異がある。また安芸国では同じ官営施設であっても国分寺と駅家で別々の文様が使い分けられていることが分かる。この事象は，

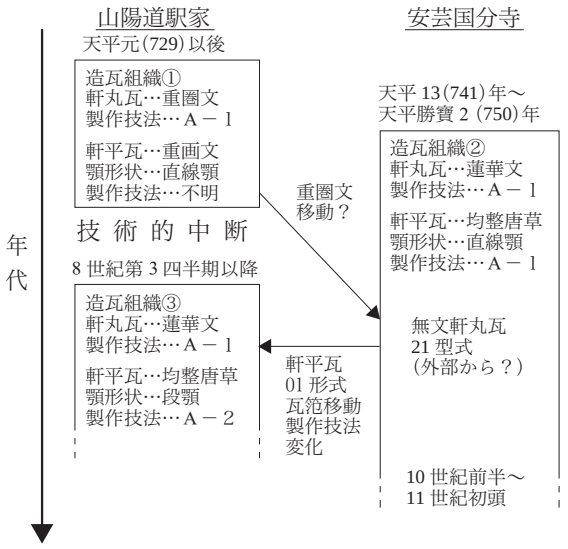

図４　安芸国における軒瓦生産体制想定

「文様の選択にあたって，特定の文様を忌避する例」[12]とされる。

安芸国における問題として，安芸国分寺への軒丸瓦11，21型式の導入時期・経路の確定が必要である。重圏文である軒丸瓦11型式の導入が，駅家での瓦生産体制とどのように関わるのか[13]，また製作技法の全く異なる無文軒丸瓦21型式がどこからやってきたのかを，解明する必要がある。その他には，重圏文軒丸瓦が出土する下沖2号遺跡の瓦実見，安芸国分寺跡における瓦出土位置・数量の正確な把握，瓦を生産した瓦窯の解明を課題としたい。

5．今後の課題

本研究による瓦実見で，安芸・阿波・上総各国の瓦生産・供給体制について基礎的な情報を得ることができた。だが今回の安芸国で提示した仮説を証明するためには，軒瓦実見数が少なくまだまだ不十分である。実際，安芸国以外では実見資料数の不足により十分な成果を挙げることができなかった。分析の精度を上げるためにも，観察数，対象遺跡，あるいは対象国を増やすことが必要である。これは官営施設だけでなく，瓦の供給・生産体制が重なる近隣寺院も含めて検討を進めたい。また，現地で行なわれている先行研究も十分に知ることができておらず，これも課題としたい。

最後に，調査研究に必要な瓦の実見に際して，以下の方々，機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。（個人・機関とも五十音順，敬称略）一山典，高橋康男，竹林邦彦，中山学。市原市教育委員会，市原市埋蔵文化財センター，徳島市教育委員会，徳島市立考古資料館，東広島市教育委員会，財団法人東広島市教育文化振興事業団，広島市教育委員会，財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課，府中町教育委員会，府中町歴史民俗資料館。

また，本研究に挑戦する機会を与えてくださった山本直人先生，梶原義実先生にも，感謝を申し上げたく思います。

注

1）（梶原2000）（梶原2003）など。

2）畿内以外で重圏文・重画文が確認できたのは陸奥，上総，甲斐，伊勢，紀伊，淡路，阿波，備後，安芸などの国々である。

3）巴文軒丸瓦など，年代的に大幅に下ると考えられる軒丸瓦5種，軒平瓦5種は対象から除外した。

4）軒丸瓦は01A型式→01B型式→02型式→03型式，軒平瓦は01型式→02型式→03型式の順に文様が変遷したと推測できる。

5）下岡田遺跡と中垣内遺跡の重画文軒平瓦については，同笵関係は不明である。

6）『日本後記』大同元（806）年五月丁丑条「勅備後，安芸，周防，長門等国駅館，本備蕃客，瓦葺粉壁，頃年百姓疲弊，修造難堪。或蕃客入朝者，便従海路。其破損者，農閑修理（略）」との記述による。（高橋1995・45頁）によれば，この記事までに瓦葺の駅家が整備されていたと考えられる。

7）『続日本紀』天平元（729）年四月癸亥条「為造山陽道諸国駅家，充駅起稲五万束」山陽道の駅家を瓦葺粉壁にする財政的処置がなされたと，（高橋1995・46頁）では解釈されている。

8）安芸国分寺跡は，発掘調査の成果から遺構が4つの時期区分に分けられている。（財団法人東広島市教育文化振興事業団2004・115〜121頁）

1．ⅠB期……8世紀中葉頃。国分寺の造営が開始され，金堂・講堂の造営着手。

2．ⅠB期……8世紀後半〜9世紀初頭。塔・軒廊・僧坊・国師院などが造営される。

3．Ⅱ期……9世紀前半〜10世紀初頭。講師院と推定される建物群が造られる。金堂・講堂・軒廊などの屋根瓦改修。

4．Ⅲ期……10世紀前半〜11世紀初頭。僧房などの諸施設が廃絶する。屋根瓦改修の可能性。

9）国分寺建立の詔が出された天平13（741）年から，安芸国分寺にて伽藍整備が一段落する天平勝寶2（750）年ごろまでとしたい。伽藍整備完了の根拠は，天平勝寶2（750）年の木簡が出土したことによる。（財団法人東広島市教育文化振興事業団　2001a・4頁）

10）現時点では同一の造瓦工人が，直線顎から段顎へ製作技法を変更した可能性も捨てきれない。

11）塔はその他伽藍施設より遅れて，8世紀第4四半期以後に造営されたと考えられている。一本造り軒丸瓦21型式（安芸国分寺グループⅣ）が塔造営当初から使用されたのか，その後の改修に用いられたのかを判断することができなかった。課題としたい。

12）（梶原2006・34頁）

13）駅家造営が一段落し，不要となった重圏文軒丸瓦の瓦笵（駅家遺跡では未出土と推定）や製品が国分寺に運ばれた，あるいは工人の移動などの可能性を考えねばならない。

参考文献

［主要論文］

梶原義実，2000，「国分寺造営期の瓦供給体制――西海道諸国の例から――」，『考古学雑誌』86–1，日本考古学会：東京。

梶原義実，2003，「造瓦組織の復元と瓦当文――東海地方の国分寺から――」，『史林』86–3，1〜41頁，史学研究会：京都。

梶原義実，2006，「瓦当文様の受容に関する一考察」，『考古学研究』53–3，24〜38頁，考古学研究会：東京。

河瀬正利，1993，「広島県下岡田遺跡の古代建築群をめぐって」，『潮見浩先生退官記念論文集』，703〜718頁，潮見浩先生退官記念事業会：広島。

財団法人東広島市教育文化振興事業団，2001a，『阿岐のまほろば』Vol. 21：東広島。

潮見浩，安田龍太郎，1991，「安芸」，『新修国分寺の研究』第4巻　山陰道と山陽道，283〜309頁，吉川弘文社：東京。

高橋美久二，1995，「山陽道の瓦葺駅家」，『古代交通の考古地理』，41〜54頁，大明堂：東京。

中山学，2005,「安芸国分寺跡01型式軒平瓦の伝播――寺院から駅舘への瓦当笵型供給――」,『芸備』第32集，芸備友の会：広島。
毛利光俊彦・花谷浩，1991,「屋瓦」『平城宮跡発掘調査報告書XⅢ』，251～369頁，奈良国立文化財研究所：奈良。
山崎信二，2003,「第２章　桶巻作り軒平瓦の製作工程（再論）」,『古代瓦と横穴式石室の研究』，38～57頁。同成社：東京。
［報告書類］
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，1999,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2000,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅱ』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2001b,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2002,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2003,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅴ』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2004,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
財団法人東広島市教育文化振興事業団編，2005,『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅶ』，財団法人東広島市教育文化振興事業団：東広島。
広島県教育委員会編，1985,『中垣内遺跡試掘調査概要』，五日市町教育委員会：広島。
広島県教育委員会編，1970,『安芸国分寺跡――第１次調査概報――』，広島県教育委員会：広島。
府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会，1964,『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第一集　第一次発掘概報，府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会：安芸郡府中町。
府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会，1963,『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第二集　第二次発掘概報，府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会：安芸郡府中町。
府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会，1966『下岡田遺跡発掘調査概報』1965年度，府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会：安芸郡府中町。
府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会，1967,『下岡田遺跡発掘調査概報』1966年度，府中町教育委員会，府中町重要文化財保護協会：安芸郡府中町。
府中町教育委員会，1983,『下岡田遺跡発掘調査概報』1982年度，府中町教育委員会：安芸郡府中町。
府中町教育委員会，1984,『下岡田遺跡発掘調査概報』1983年度府中町教育委員会：安芸郡府中町。
府中町教育委員会，1985,『下岡田遺跡発掘調査概報』1984年度府中町教育委員会：安芸郡府中町。

図版出典

図版番号		出土遺跡名	報告書
図１	1	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	2	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅰ』
	3	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	4	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』
	5	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	6	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	7	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	8	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	9	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』
	10	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ』
	11	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅰ』
	12	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』
	13	安芸国分寺跡	『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』
	14	下岡田遺跡	『下岡田遺跡発掘調査概報』1965年度
	15	下岡田遺跡	『下岡田遺跡発掘調査概報』1965年度
	16	下岡田遺跡	『下岡田遺跡発掘調査概報』1965年度
	17	中垣内遺跡	（中山2005）
	18	中垣内遺跡	（中山2005）
	19	中垣内遺跡	『中垣内遺跡試掘調査概要』一部改変
	20	中垣内遺跡	『中垣内遺跡試掘調査概要』一部改変